

江戸時代の緑色染織布中の天然染料の鑑別

道明美保子*、西原仁美**、○木村光雄** (*滋賀県立大、**神戸女大・院)

目的 これ迄に、二千年前のアツタール古墳をはじめ、シルクロード遺跡などからの出土染織布について天然染料の鑑別を試みてきた。それらの中で特に緑色は古来極めて重要な色調の一つであって、いずれに於いても染色には藍と黄色染料の重ね染めが行なわれているが、黄色染料の種類や使用法については未だ不明な点が多い。そこで、本報においては、江戸時代の染織布で抽出法による鑑別の可能な35種類の絹試料について、それらの緑色部分に用いられている染料の鑑別を試みた結果を報告する。

方法 まず標準染色絹試料を作製した。古来の緑色染めに用いられてきた黄色染料としての確率が高いと考えられる苧安、梔子、黄蘗、楊梅、石榴及びミロバランを選び、それぞれ常法に従って煎出し、予め染の発酵建てにより藍染めした絹布を浸染した後、灰汁またはアルミニウム媒染を行なった。供試染織布は既報と同様に色素を抽出し、吸収スペクトルの測定結果を標準染色試料の場合と比較することによって鑑別を行なった。

結果 供試染織布の緑色部分を模様や地染めと刺繍糸とに分けて鑑別を行なった。まず刺繍糸部分については、白色部分を含めていずれも光沢を持った美しい色調を保っているが、測定結果はいずれも黄蘗の特徴を示しており、藍染めの上に黄蘗（または黄蓮）染めしたものと鑑別した。次に模様と地染め部分については、明るい色調のものには梔子または黄蘗、濃い色調のものには楊梅または石榴と推定されるものが多いなど色々な染料が使用されていた。従って、刺繍糸の場合には光沢を考えてカチオン性色素を含む黄蘗を、模様の中や地染めの場合には必要とする色調によって染料を使い分けていたと考えられる。